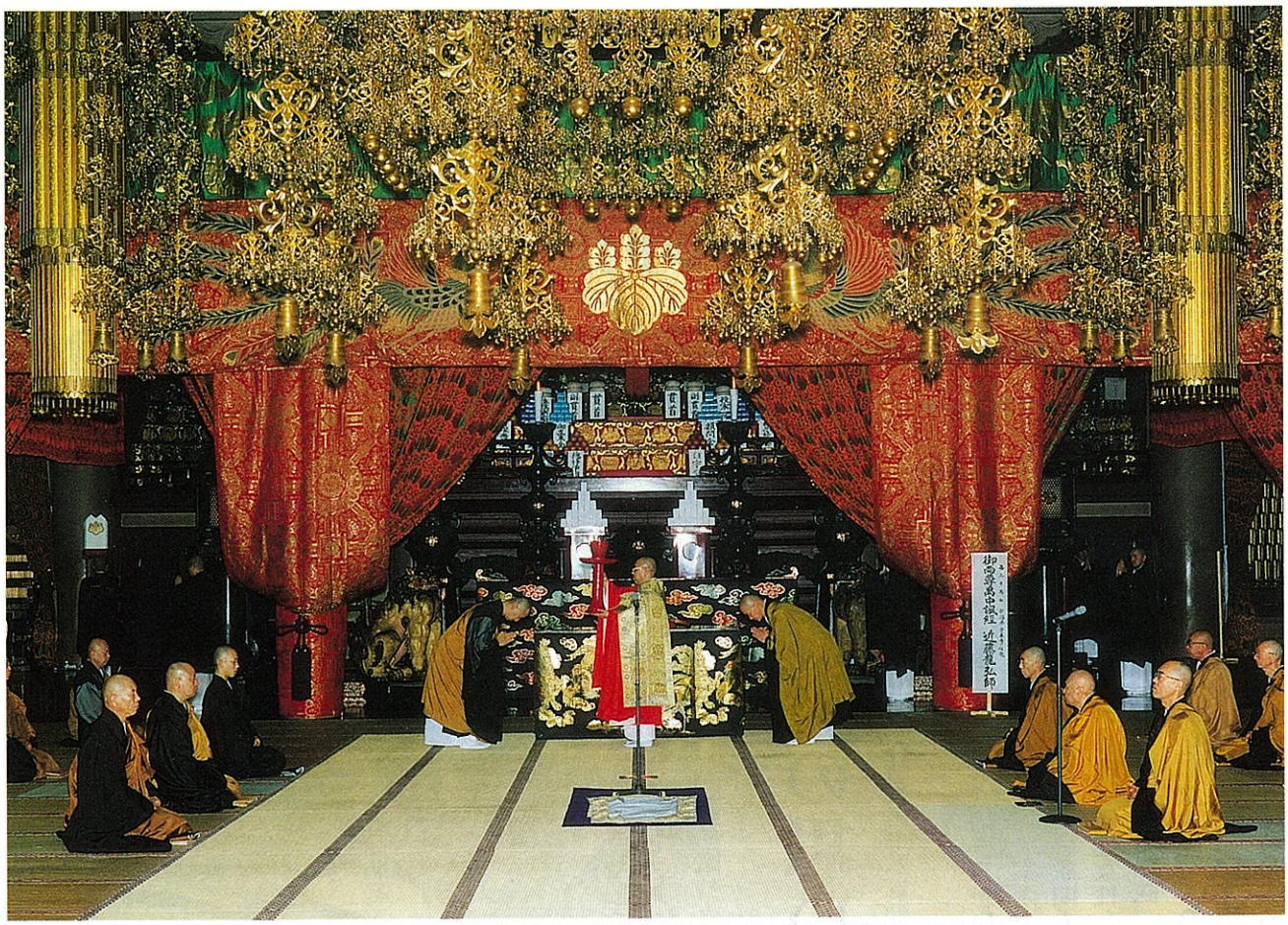


御両尊（瑩山禅師、嵯山禅師）様に蜜湯・お菓子・お茶を恭しく献じているところ

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811

◆スタッフ◆
安藤一夫
小林国二　小林善秋　高橋潔
佐藤正樹　近藤マリ子　近藤善信

今世紀最後の年『龍』年を迎えて

翠巌 龍弘

謹賀新年

皆様方の萬福を祝祷申し上げ、尚今年も宜しくお願い申し上げます。

平成十二年・西紀二千年を皆様方はどのようにお迎えになられたでしょうか。

十二月三十一日から一晩経過して、新年一月一日を迎えたわけですが、宇宙の営みからみれば、ただ時間の経過に過ぎず、何年とか月日は関係ありません。

人間が生活する上での都合上、太陽に対して地球の位置の一点を捉えて、一年の始まりとし、十二ヶ月の暦が出来たわけですが、年が変わるという節目があることは大変重要なことではないでしょうか。

暮れにはお互い大掃除など、大変忙しく過ごして新年を迎えたわけですが、何故でしょう。

私共は良きにつけ、悪しきにつけ、過去にとらわれ、執着しがちであります。忘年会などは、一年間の諸々の事柄を過ぎ去ったものとし、未来に尾を引かないよう区切りをつけ、新年を迎えるためのものではないでしょうか。また、やらなければならない事柄も、そのうちにと一日延ばしにしがちです。大掃除に代表されるように、新年を迎える節目として大晦日まで、年内のことは年内にと頑張り、よって気持ちを新たに新年を迎えることが出来るのではないでしょうか。

今年は二十世紀最後の年です。二十一世紀に禍根を残さぬためにも、今年のうちにやるべきこと、やらなければならない事柄を精一杯やり、二十一世紀に繋ぎたいものです。

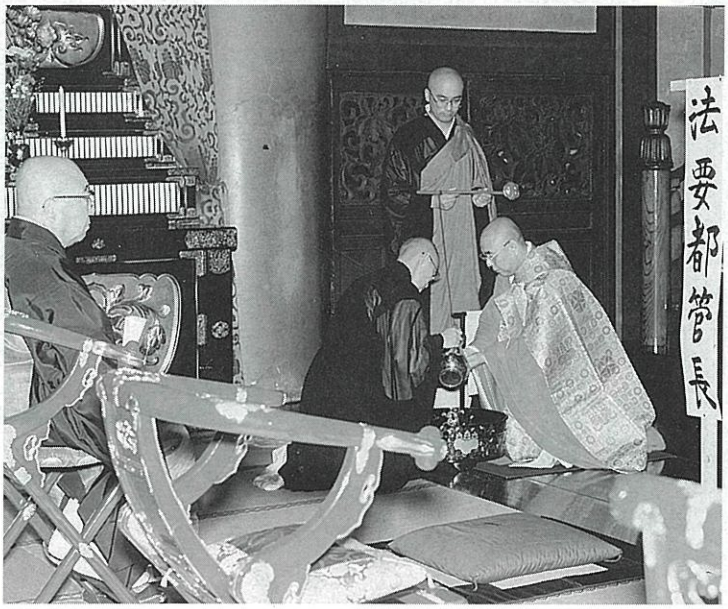
今年は**龍**年でもあります。龍は、熟語や諺にも多く使われており、仏陀の説法教化をたすける八部衆の一つで、龍神・**龍**王ともいわれます。

皆で龍にあやかって悔いのない一年間を過ごし、素晴らしい二十一世紀を迎えることを念願致します。合掌

大本山總持寺 御征忌焼香随行記

檀信徒の誇り、感無量の思い

◉太刀川進之介（長岡市水道町）



須彌檀へ上がり、御両尊に献香するために手を清めている

十月十三日朝、御征忌焼香師としての方丈様に随行する人々は、本堂でお経をあげて成功と無事を祈り、安善寺を大型バスで出発して、三時に大本山總持寺へ到着しました。

まず、形山瑾映禅師様が眠られる墓碑に参拝。歴代禅師様方の大きな墓碑に圧倒されつつも親しみを覚えたのは方丈様の奥様のお父上なる故でしょうか。

総受付のある三松閣は実に静寂で、ホールの床は磨き清められ、ここに立つだけで身の引き締まる思いがしました。僧侶の案内で三松閣の設備などの説明もあり、その後、男性女性と分かれてしばし休息懇談。

六時に二階食堂で夕食をいただきましたが、工夫された精進料理に感じ入ること頻り。夕食後は開祖の瑩山禅師様についての映画を見させていただいて入浴、九時に就寝いたしました。

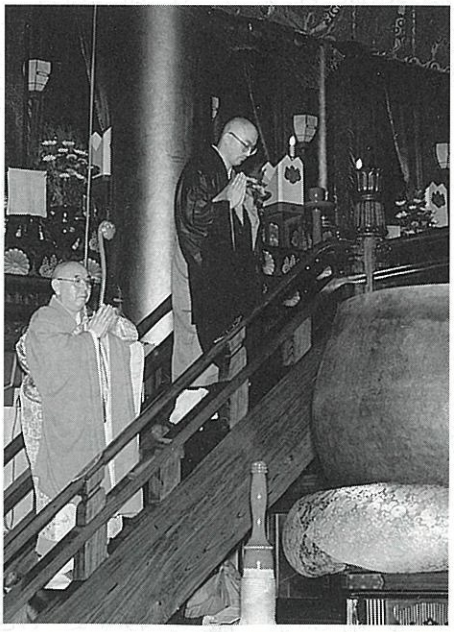
翌日は、早朝四時起床。僧侶の案内で太祖堂に赴くも、ここは千畳敷の広い本堂にもかかわらず、大勢の僧侶で埋め尽くされていて驚きました。

朝の勤行が始まり読経の中、修業僧たちが「大般若経」の経典をセットで捧げ持ち歩く様は、荘厳にして優美、優雅にして迅速な動作であり、感動し息をのむ思いでした。僧侶達の長い読経の後、私共随行者も須弥檀の前に進み、焼香をして勤行を終えました。

朝食は大書院の紫雲台相見の間。方丈様が焼香師の大役を勤められる祝膳としての上膳料理をいただく。調理味付けに精進料理の粋を味わいました。

この相見の間の襖絵は、一連の松楓秋草図が描かれていて、その華麗さに目を見張りました。

禅師様との接見では、さりげなく長岡に因んだお話をされて親しみを覚え、私共の緊張を和らげる話し方、柔和なお顔、慈悲の心の深さが感じられて、お会いしているだけでありがたい気持ちになれました。



接見の後、私共は太祖堂に移動して大法要。この太祖堂には五十数人の僧侶が居並ぶ中、近藤龍弘導師が緋の法衣を着けて須弥檀前の中央の座に進まれ、御征忌法要が始まりました。

焼香師としての方丈様の落ち着いた一挙手一投足に見入り、立派なお姿に感動し、涙の出る思いでした。読経の中、私共随行員も焼香をさせていただいて法要は終わりました。

私は、龍弘方丈様が焼香師としての大役を立派に果たされたことに、檀信徒として誇りを覚え、感無量の思いを抱きつつ、大本山總持寺を後にしました。

焼香師の大役、龍弘和尚さん

◉高橋　房子（長岡市南町）

太祖堂の屋根と緑の木々を眺めながら、總持寺へバスは入って行きました。

早速、歴代禅師様のお墓参りに行きました。あまり大きくない木々の中の広い所の中央に、すっきりとしたお墓がありました。私共をお護りくださっていらっしゃると思い、手を合わせ、方丈様の読経の声に聞き入りました。

翌朝、太祖堂は神々しさの中にも、絢爛と輝く天蓋のもと、両側に毅然と居並ぶ僧侶様方に目を見張っておりました。チーン、チーンと鐘の音と共に、緋の衣と黄金色のお袈裟をお召しになられた、焼香師をおつとめになられる方丈様がお出ましになられました。

遶行（行道）経を誦みながら堂中をめぐり廻る法要

千畳敷という大祖堂で微動だにされぬ荘厳な方丈様のお姿は、なんと大きく見えたことでしょう。すると墨染の衣の方々がスーとすり足で経本を捧げて、一部づゝ無駄のない動きをされたさまは、別世界のうちにいるように身に沁みて感じました。

焼香師の読経の中で、瑩山禅師様、峨山禅師様のお二方様への蜜湯・お菓子・お茶などの献供が数人もの手を経て、手馴れた手つきと落ち着き払った立居振舞を眺めさせていただき、心に沁み入る思いで一杯でした。

墨染の衣に木欄のお袈裟をつけた何十人もの方々が、経本を持って立ち上がられ、その行きかうさまは渦巻くような動き。その中で緋の衣の方丈様のお姿を追いながら荘厳な中にも暖かいものに包まれ、安心の気持ちにひたり、夢心地ですばらしい体験をさせていただきました。

いよいよ私たちが親しく、瑩山禅師様、峨山禅師様、御先祖様に焼香させていただくことになり、身を固くして順を待ちました。こんなにお近くでと、感極まりました。

それから、板橋禅師様のお話がありました。仏心を説かれ、小欲知足の心得をお教えくださいました。新潟県や長岡を織り込み、慈愛に満ちた尊顔でのお話をありがたく拝聴いたしました。この後に上膳朝食です。

知客和尚様からお言葉をいただきました。朝食の祝膳は「アッきれい、もったいない」と叫びたくなるような、本当に見事なものでした。御霊供膳のように朱色の御膳と器、そして二の膳までありました。

器の朱色に薄色の御馳走が調和して、見るからに箸を取りたくなりました。味も香りもおいしい、アー極楽浄土を見せてもらったようだ。「御馳走さまでした」。

お土産に、總持寺様の資料を沢山いただきました。折にふれ、しみじみと拝見拝聴させていただき、お箸は正月用に、記念のふきんは額に入れて長くこの感激を残したいと思います。

このたび、方丈様は焼香師の大役をお果たしになられ、おめでとうございました。参加させていただきましたこと感謝申し上げます。

合掌

わが人生最高の感激

方丈様の威風堂々たる焼香師の大役

◉加瀬マサ子（長岡市東新町）

「初秋の風吹く爽やかな去る十月十三日、十四日の両日大本山鶴見總持寺にて、方丈様が焼香師の大役をなさることになりましたので檀家の皆様方大勢のご参拝を」とご案内をいただきましたが、私には焼香師というお言葉さえも初耳で、何もかも知らない中での参加となりました。

總持寺は、東京大空襲の年に法要に行った記憶がありますが、戦後五十年という歳月の中での発展に驚くばかりでした。松並木の両側に鶴見大学の校舎、三松閣の壮大な建物が聳え、緑葉樹と高台の傾斜の美しさに心打たれました。

やがて堂内に案内されて仏殿に参り、大祖堂での儀式。ざっと居並ぶ二百人近い僧侶さんの一糸乱れぬ迅速な規則正しい行動は、まさに静寂な中での感動としか言葉が見あたりませんでした。また、方丈様の威風堂々たる焼香師の大役、本当にご立派でした。私はしっかりと安善寺様の檀家であったことを誇りに思いました。

儀式終了後、お祝いの宴席が紫雲台という部屋でありました。

そのお料理の見事な出来栄え、また輪島塗りの器に盛りつけられ、素材を色鮮やかに演出した精魂込めたお料理でしたが、私はいつもいただく安善寺様のお料理も大好きです。白合え、ぜんまいの煮物、香の物、どれをとりましても總持寺より優るとも劣らないと思いました。

焼香師という儀式に参列できましたこと、我が人生最高の感激でした。ありがとうございました。　合掌

色鮮やかに、かつ伝統を守った精進料理

龍弘流 読者とのQ&A

Q 仏教とは、どういう宗教ですか？他の宗教、キリスト教、イスラム教などとは、どうちがうのでしょうか？

A 仏教は、お釈迦さまが仏陀伽耶（ブッダガヤ）で三十五歳の十二月八日に、成道（悟りを開かれ、仏陀になられた）に端を発し、鹿野苑（ロクヤオン）の初転法輪（仏陀となられたお釈迦さまが、最初に説法された）以来、八十歳の二月十五日に、拘尸那（クシナ）伽羅（ガラ）の沙羅林中で入滅に至るまで、随処に開示された教法をもって、その根本とするものです。

仏陀の教えであり、釈尊の説いた教法です。如来の教説・世尊の教説ともいいます。

キリスト教がイエス・キリストの教えであり、イスラム教がモハメッドの教えであるのと同じです。

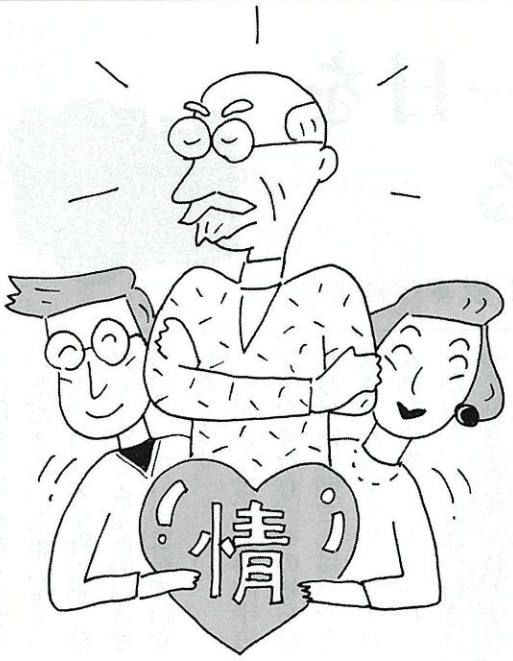
ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などでは、教祖の教えを学び、信仰し、唯一絶対の「神」へ帰依することを勧めますが、人間が神になることができるとは言いません。ところが、仏教では、仏陀（理想の人格者）となるための教えでもあります。私たちみんなが仏になることを目指すのが仏教であるとも言えます。

七仏通誡偈（シチブツツウカイゲ）（仏教の要旨はこの四句に尽きるとされる）に「諸悪莫作（しょあくまくさ）・衆善奉行（しゅぜんぶぎょう）・自浄其意（じじょうごい）・是諸仏教（ぜしょぶっきょう）」とありますように、仏教とは、悪いこと（他を困らせたり、悲しませたり）をせず、善いこと（他を喜ばしたり、希望を与えたり）をして、自分の心を清く（争いのもとである欲を少なくして、平和のもとである慈悲・いつくしみの心）して、信仰（仏・法・僧の三宝に帰依する）をもって生きることを根本目的として教えております。

また、仏教の根本特徴として「諸行無常（しょぎょうむじょう）・諸法無我（しょほうむが）・涅槃寂静（ねはんじゃくじょう）」の三法印、またこれに「一切皆苦（いっさいかいく）」を加えた四法印（万有の真理を示す四つの標印）が、一切仏教に通ずる根本教理として説かれ、これらの法印が縁起説としてまとめられ、仏法は「縁起」の法であるともいわれます。

ぼけたらあかん、長生きしなはれ

天牛将富さんの詩より



年をとったらでしゃばらず、憎まれ口に泣き言に、人のかげ口、愚痴いわず、他人のことは誉めなはれ。

聞かれりゃ教えてあげてでも、知っていることでも知らんふり、いつでもアホでいるこっちゃ。

勝ったらあかん負けなはれ、いずれお世話になる身なら、若いもんには花もたせ、一歩下がってゆずるのが、円満にいくコツですわ。

いつも感謝を忘れずに、どんな時でもへえおおきに。

お金の欲を捨てなはれ、なんぼゼニカネあってでも、死んだらあの世に持っていけまへん。

あの人はええ人やった、そないに人から言われるように、生きているうちにバラまいて、山ほど徳を積みなはれ。

というのは表向き、ほんまはゼニを離さずに、死ぬまでしっかり持ちなはれ。

人にケチやといわれても、お金があるから大事にし、みんなベンチャラいうてくれる。内緒やけどほんまでっせ。

昔の話はしなさんな。わしらの時代はもう過ぎた。なんぼガンバリカんでも体がいうことききまへん。あんたらえらい、わしゃあかん、そんな気持ちでおりなはれ。

わが子に孫に世間さま、どなたからでも慕われる、ええ年寄りになりなはれ。

ボケたらあかん、そのために、頭の洗濯、生きがいに、何か一つの趣味持って、せいぜい長生きしなはれや。

天牛将富さん作詞の『ぼけたらあかん、長生きしなはれ』からの引用ですがな。

楽しい老後を送るのに、「老いては子に従え」は保身の術、これがほんま現実の教えですわ。

そやけどなあ、卑屈になったらあきまへんで。親は親らしく自信もちなはれ、見識蓄えなはれ、もっと親の威厳もって子に接しなはれ、親の生きざま背中で教えてやることや。

ようできた子なら、親への恩愛の情は忘れまへん。大事にしてくれますわ。

親子の断絶、子に見放される親の悲哀、そんなん味わうことおまへん。これ、ほんまのことでっせ。(編集・安藤)

ペコ大蔵日記

猫で良かった！

近藤 弘子 代筆

暑い夏が終わったと思ったら、もう私の大嫌いな冬になりました。

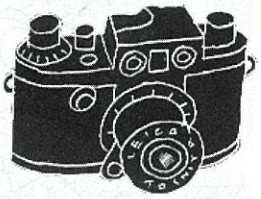
昔の猫は炬燵で丸くなっていると聞きおよんでおりますが、お寺には炬燵がないので居間が充分に暖かくなるまで、お姉ちゃん（弘子）の布団の中で寝ております。

私の一日は、午前十時ころに起床、お母さんを捜し朝食の催促をします。この時の鳴き方が重要です。長い経験と、猫族代々に伝わるテクニックがあります。優しく、甘えるように、なおかつ微妙に悲しそうに「ニャーン」と鳴き、頬をお母さんの足に擦り付ける挨拶をするわけです。すると八割方お母さんは「アラ、ペコちゃんおはよう」と、挨拶を返してくれ、私の食事と新鮮な水を用意してくれるわけです。お母さんが忙しがっている時に、私の存在をアピールするのを忘れると食事にもありつけないのです。

そうそう、十一月の事でしたが、風が少し吹いたら木の葉がどんどん散ってきて、それはもうとても綺麗だったんです。落葉は自然が与えてくれた私のベット。木の葉の上での昼寝は最高！一冬過ぎれば大地の栄養分…、それなのに、住職はじめ人間はなぜ掃き掃除をするんでしょう。私から見れば、自然に逆らう無駄仕事のように思えるんですが。

十二月十九日は、お寺の大掃除とかで、大勢の人が雪の降る寒い中、本堂や稲荷堂、境内の掃除をしておりましたが、戸が開けっ放しなので寒くて、こんな日は布団の中が一番と日中寝ておりました。人間は寒い中での仕事…。今回もつくづく猫で良かったと実感しました。

今日一日を生きる



泰山正樹◉(佐藤 正樹)

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

山形県酒田市に、土門拳記念写真館があります。私は、写真の良否はまったく理解できない愚人でありますが、写真家のエッセイ、特に土門さんのものは大好きで、多くの名文に深く感動を受けております。

今回はその中の一つ「棺の上に飾る写真」を紹介させていただきたいと思います。友人で詩人の草野天平(草野心平の弟)さんとのいきさつです。かいつまんで紹介いたします。

天平さんは、享年四十三才でなくなり、その知らせを受けた土門さんはハッとなさったそうです。天平さんの写真を一度も撮ったことがなかったのです。付き合って丸々十五年、一枚パチリと撮ることなど、造作もなかったことなのに。写真家の友達を大勢持ちながら、それなのに棺の上に飾る写真がない、天平君に申し訳ない。

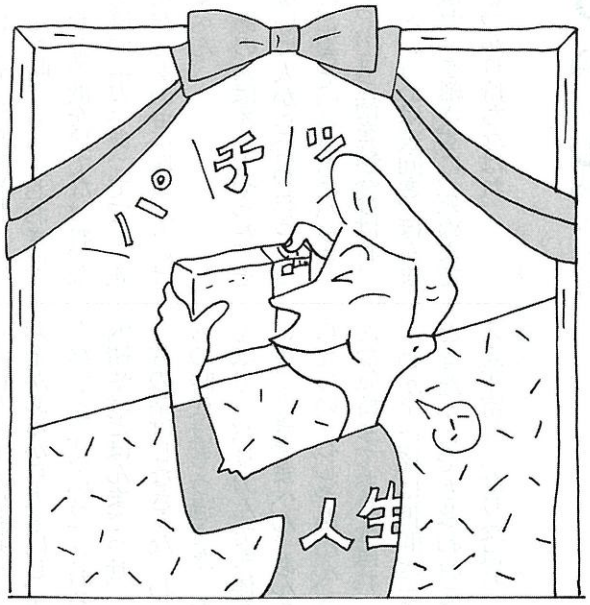
「本当に、今後は生きているということを、本人も周囲の者も、お互いに仇やおろそかにしないことにしょう。昔から老少不定という通り、今日生きているということは、必ずしも明日も生きているということを保証しはしないのです。それは、分かりきったこと、しかし、誰もが忘れているのである。

明日も、そして来年の今日も当然生きているつもりでいる。だから、誰も棺の上に飾る写真を用意しようなどという気を起こさないのである……しかし、人間は誰しも死ぬ。しかも思いがけず死んだりする。……死んでしまったら、写真は撮れない。……」(死ぬことと生きること」土門拳より抜粋)

そうなんです、私たちは自分の健康、地位、財産が動かないものと錯覚して生きている。ハッとさせられます。

日々の生活に追い廻され続けている、今の姿、ハッとしましょう。

ハッとして、もう一度自分というものを見つめ直してみましょう。



安善寺親睦旅行

悠久の大地『北京・西安5日間の旅』

2000年 5月6日(土)	安善寺 12:30 ═══ 新潟空港 新潟空港より、中国西北航空にて上海へ。	上海 ㊞
7日(日)	空路北京へ。故宮・天安門広場など北京市内観光。	北京 ㊞
8日(月)	明の十三陵・万里の長城など北京郊外観光。空路西安へ。	西安 ㊞
9日(火)	終日、西安観光。兵馬俑坑・始皇帝陵、華清池へご案内します。	西安 ㊞
10日(水)	朝食後、空路新潟へ。午後5時30分頃、安善寺到着予定。	

■期　日/平成12年5月6日(土)～10日(水)
■旅　費/148,000円
(他、中国査証代、手続費用など別途に約10,000円ほどかかります。)
■募　集/20名
■申込締切/2月末日までにお願いします。
■申　込/安善寺まで(TEL.0258-32-2811)

お釈迦様誕生の地ルンビニー ネパール紀行 その一

近藤マリ子

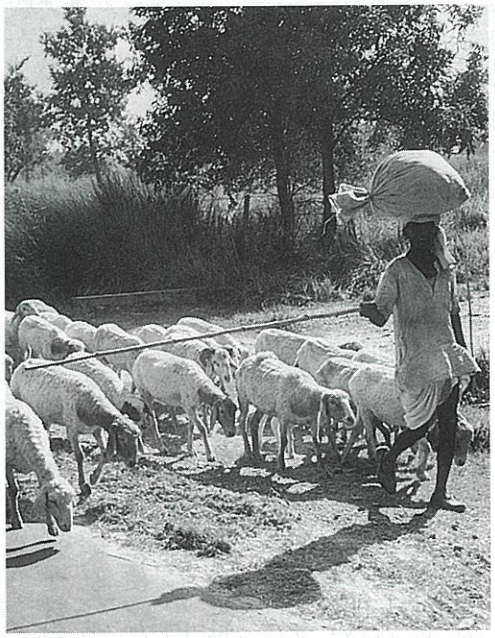
四年前、長野の藤本幸邦老師に「ネパールに学校を建てるための視察に行くのだがお供しないか」と言われ行ってまいりました。その時のご縁で三年前からネパール里親運動を積極的にやっておられるカジ・シャキヤ氏と知り合い、お檀家の方々の協力をいただきながら、現在十五名の子供の教育資金援助を続けております。

何か事を起こすと自然と人の輪が広がってくると申しますが、新潟大学に留学しているネパールのティワリ・ビノド氏を知ったのもその直後でした。彼から「新潟空港からチャーター便が出るのを知っていますか」との電話で、私のネパール行きが決まりました。

前に行った時と違い、今回は「子供達に会うこと」「現地の人の生活そのものに触れたい」(教育に関するもろもろの相談)ことが目的でした。私たち一行三名がネパール空港に着くと、カジ氏が出迎えてくださり「かた」という歓迎のしるしの白い絹の布を首からかけてくださいました。

この地に足を踏み入れたのですから初日は「お釈迦様誕生の地「ルンビニー」へ、何時飛んでくるか解らない飛行機を待つこと三時間余、遅れたおかげで機中から真っ赤な夕焼けがヒマラヤ山脈を包み、壮大なまでの景色を眺めることができました。

一時間位の飛行の後、ゲストハウスへ向かうタクシー(サイドミラーも取れ、車内のメーターも壊れている)の前を何頭もの水牛がゆっくりと歩き、毛を刈り取られた羊の群を連れた羊飼い…、くずれ落ちてきそうな荷物を乗せて家路へと走る自転車、只々全てが何ともゆっくりと時間が過ぎてゆくように感じられました。



案内されたゲストハウスは十五畳くらいの部屋にベッドが置かれ、天井は今にも落ちてきそう。窓にはヤモリがへばりつき、電気を消すと天井裏で凄まじいネズミの音。怖くて電気をつけようとするのですが、停電になったらしく、その後電気はつかない状態。もちろん水は出ず、買い持ってきたペットボトルの水で口を濯ぎ、ぬれティッシュで顔を拭く。現地の人の生活そのものとは望んだものの、初日から不安がよぎりました。ちなみに三人で五百ルピー(日本円で千円弱)の宿泊費でした。

でも、翌朝行ったルンビニー公園の中にあるマヤ聖堂や、マヤ婦人がお釈迦様を出産なさる前に沐浴をされた池(造り替えはされたものの、中の水は絶えたことがないとのこと)、その横の大きな菩提樹の前に立った時、身体の中から込み上げてくるものを感じ、仏教徒であることを再認識し、ここを訪れることができた幸福をかみしめ、残されたネパールでの日々に希望が出てまいりました。

(次号へ続く)

お別れ

(平成十一年九月~十二月廿五日)

岩佐ミチ様　九月七日寂　長岡市福住

●

田中五郎様　九月十日寂　長岡市福井町

●

片山イツ様　九月二十日寂　大分県別府市

●

岡地栄氏様　十一月六日寂　長岡市蔵王

●

上田ユリ様　十二月五日寂　長岡市西神田

●

須佐ミサホ様　十二月十二日寂　長岡市稽古町

●

三浦徳之助様　十二月十五日寂　長岡市呉服町

●

ご冥福をお祈り申し上げます。

お詫び●季刊誌第七号に神奈川県葉山町 永井安宅様よりご寄稿いただきました『城下町遺烈』、校正ミスで本文の一部が脱字しておりました。謹んでお詫び申し上げます。編集部

山西省の小学校開校式に出席

中国に藤本幸邦老師のお供をして

近藤　真弘

八月三十日から九月五日まで、僕は得度のお師匠様で長野県円福寺の藤本幸邦老師のお供で中国に行って来ました。

旅の目的は、藤本老師ら円福友の会の有志の方々のご寄付で中国山西省の貧しい村に小学校が建ち、その開校式に出席することです。僕は、今回藤本老師の身の回りのお世話や、荷物持ちということで同行させていただくことになりました。

八月三十日、日本を出発し、北京から飛行機で二時間の太原という所に行き、翌日太原で観光をし、九月一日に開校式を行う村に出発しました。

小学校を建てた村は、太原から車で山道を五～六時間走った所で、村には電気はもちろん水道もなく、そしてなにより驚かされたのは、この村には今まで外国人が足を踏み入れたことがなく、僕たちがその村の人達にとって初めて見る外国人だったということです。

村に着くと村人総出で盛大に出迎えてくれ、そのまま開校式に参列しました。開校式はその地方の県令（その土地の市長さんのような人）の方なども出席し、小学生による楽器の演奏なども交え、盛大に行われました。

三時間程の開校式を終え、翌日太原に戻った僕たちは、太原にある小学校を訪問しました。ここで、小学生による歌や踊りで歓迎され、授業の見学をしました。同じ小学校でも昨日行った村の小学校とは違い、太原の小学校ではパソコンを使った授業などがあり、同じ中国でも教育レベルの違いに驚かされました。

その後、太原の大学で今回学校を建てた村ではない他の村長さんなどと話し合いがあり、来年また寄付を募りその村に学校を建てることになりました。

翌日は北京にも行き、天安門などを観光し、九月五日に無事に帰国しました。

今回の旅では普通の観光旅行では経験できない様々な体験ができ、日本にいると気が付かなかった事も見え、思い出深い旅となりました。

投稿歓迎

投稿をお待ちしています

春のテーマ:「安善寺の思い出」

3月発刊の春号は檀信徒の皆様のページを設けました。

テーマは「安善寺の思い出」です。

タテ12字、30行くらいでお願いします。

お手紙・ファックス・Eメールのいずれでも結構です。お待ちいたしております。

〒940-0052
長岡市神田町1-4-10
安善寺　近藤 龍弘
FAX.0258-32-2870
Eメールアドレス
vc2r-kndu@asahi-net.or.jp

編集雑感

季刊紙の創刊に携わり回を重ねること八回目。しかも、今回は二千年年明け新年号。末筆に加わる栄誉を与えてくださった編集長にまず持って感謝申し上げます、と同時に、読者の皆様あっての季刊紙ですので、皆様にも御礼とご挨拶を申し上げます。

「新年明けましておめでとうございます。これからもご支援賜りますようお願い申し上げます。」

さて、編集雑感とは言え何を書こうかいつも迷います。苦労話し程ではないのですが、裏話しを少々暴露しましょう。編集会議は安善寺でもちろん行います。紙面作り、テーマ作り、担当者決め、原稿依頼と、編集長のセンスで進行します。

小生は当番が来ないことを祈り、出来るだけ担当を押しつける努力に余念がない。が、編集長の一喝で総てが決される。それについては皆納得するのです。編集長は季刊紙の費用を布施し、しかも毎回必ず最高級の般若湯を持参されるからです。これには文句のつけようがない。小生は特にこれに弱い。

また、何度も記しますが、奥様の手料理がたまらない。旬の凝った手料理を戴けるのは編集委員の特権です。いつも酔ってしまい、大事なことを忘れて困ります。

酔う前に皆様にお願いを記します。編集に際し投稿原稿の言葉使いなどを若干ですが直す場合もございますのでご了承ください。

近々の出来事、世に申す、なんでもけっこうです。素人編集ですが、一生懸命やります。読者の皆様と共に育てる季刊紙です。懲りずご投稿をよろしくお願いします。

匆々

編集委員　小林国二　拝

第九号、春号は平成十二年三月六日(月)発刊予定です。

9.インターネットやワープロ、碁や将棋、頭を使うゲームをする。　10.好きな趣味や道楽を見つけてコツコツやる。